

あ と が き

ソチオリンピックでは、フィギュアスケートで金メダルを獲得した羽生選手をはじめ、多くの日本人選手たちが素晴らしいパフォーマンスを発揮し、我々に夢を与えてくれた。そのパフォーマンスの中には、極限まで高められた運動体力と運動技能が集約されている。そしてそれらの力を十二分に発揮するためにはメンタル面のコントロールが不可欠である。この極限まで高められた“身体”、“わざ”、“こころ”こそがオリンピックの「本質」であると言って良いだろう。ところが、オリンピックの報道は、そうした芸術とも言うべきアスリートの「本質」ではない部分にばかり焦点を当てていた。私は、「我々はスポーツの醍醐味を本当に理解できているのだろうか?」、「我々は本質を見落としているのではないか?」という疑問を拭うことができなかった。

さて、昨今の大学を取り巻く環境に目を移すと、少子化による18歳人口の減少や大学数増加による学生確保の困難化などが叫ばれ、いかに学生を確保するかという議論ばかりに終始しがちである。「より多くの学生が入学すること」は私立大学にとって最大の関心事である。しかし、その土台には高い教育力があり、さらにその土台には各教員の研究がある。オリンピック報道と同様、本質を見落とした議論にならないよう、我々は意識を持たなければならない。

本号には例年以上に多くの先生方から論文をご投稿いただいた。これらの論文は学生教育、大学運営等日々の激務の中にあっても研究活動を着々と進められた1つの現れであるとともに聖泉大学が充実する基盤である。そして、多くの若者が「聖泉大学に来て学びたい」と考える未来をつくる一石でもある。是非とも多くの方に読んでいただき、教員が日頃行っている研究を少しでもご理解いただきたいと願う。これらの研究の「本質」は、必ずや多くの人たちに本学の魅力と価値を伝えてくれる一助となる。

2014年3月吉日

聖泉大学人間学部 紀要委員長 炭谷将史